

『金剛界大曼荼羅諸天建立』について

——「勝義」と「世俗」を中心に——

木村美保

1-1. 本研究の意義について

『金剛界大曼荼羅諸天建立 (Vajradhātu-mahāmaṇḍala-sarvadeva-vyavasthāna-nāma 以下、VSV とする)』¹⁾の著者は Muditakoṣa で、チベット語訳のみが現存している。

筆者は、これまで拙稿において『降三世大儀軌王 (Trailokyavijaya-mahākālpā-rāja 以下 TLV とする)』のマンダラを取り上げ、Muditakoṣa による注釈書『聖降三世と名づくる注釈 (Āryatrailokyavijaya-nāma vṛtti 以下 TLVV とする)』とともに考察してきた [木村 2015] [木村 2016]。

現在のところ、先行研究によっても、この著者である Muditakoṣa の年代が特定できず、TLV が TLVV と共に『パンタンマ目録』という古い目録に記載されていたといった事実より推察する他はない。Muditakoṣa は、チベット大蔵経を見る限り VSV と TLVV の二つの儀軌にしか名前が出ておらず、VSV と TLVV とともに『金剛頂経』系の注釈書であることから、同一人物の著作であろうと推測される。以上のことから、両者は大きく時代を隔てるものではないと推測される。

また、近年 TLV についての研究が多くなされていること²⁾からも、その注釈書 TLVV を著した Muditakoṣa の他の著作について、言及するのは意義があると思われる。

VSV の構成や内容については、先行研究である [北村 1974] によって既に述べられているところである。その後 42 年余りが経過しているが、その間の研究としては管見するところ、わずかに [松森 2003] において金剛薩埵の定義付けの一例として引用されているものと、[中島 2012] で

Muditakoṣa の著作として触れられているのみであり、VSV については、今一度再考する意義があるかと思われる。

1-2 問題の所在

本文の構成や内容については、先述のとおり [北村 1974] に詳細に述べられているが、ここに簡単にまとめる。分量は、デルゲ版にしてわずか四葉（表裏 8 枚）に満たない短いものであり、「勝義の瑜伽を示した第一章³⁾」と「世俗と勝義の相応を示す第二章⁴⁾」の二章からなっている。

第一章では、金剛界三十七尊の自性と十二の地次第が述べられて、五仏・四波羅蜜・八供養・四摂の略説を述べる。

第二章では、Muditakoṣa が各尊の尊容を他の経軌を経証とした後に、勝義としてのマンダラにおける「数」「諸尊配列」の決定について述べている。

本文全体を通じて、「勝義」と「世俗（あるいは俗諦）」の二つがキーワードとして用いられている。

[北村 1974,83] は、本文献について、「東密で重んぜられる『三十七尊心要』『三十七尊出生義』『分別聖位経』等に相当するものであり、金剛界マンダラ主要尊のメモ風なものである⁵⁾」と位置づけている。

一見統一されたテーマがあるように見えながら、取り上げる話題が、諸尊の配当から尊容と数の決定と次々と変わっていくために、全体として散漫な印象である上に、毘盧遮那の自性を「清浄法界の自性⁶⁾」また「法界智⁷⁾」とするように、用語が不統一なところからも、[北村 1974] の述べるように「メモ風なものである」との感は否めない。

そこで、本稿においては、VSV の内容を「世俗」と「勝義」に焦点を当てて考察していきたいと考える。

2-1 「三十七尊の自性」について

第一章において、三十七尊の自性は、五仏・四波羅蜜・十六大菩薩・八供養・四摂の順で説かれている。

三十七尊の自性については、「△△」を貪欲などの「世俗」のもの、「○」を大円鏡智などの「勝義」のものとする、「△△を離れた (bral ba)」

「○○の因となる (rgyur gyur pa)」 「○○の自性 (ño bo ñid)」あるいは「△△とは異なった (ldog pa デルゲ版では、bzlog pa の箇所もある。還梵するならば vyatireka/vyatirikta が考えられる)」と言った表現が多く見られる。

二～三例を挙げるとするならば、

(太字にして下線を引いたのが、「世俗」に相当するものであり、「△△」とする。同様に、太字にして下に波線を引いたのが、「勝義」に相当するものであり、「○○」とする。)

(阿闍如来) その尊において貪欲など無余の垢を離れて⁸⁾ それより
↑ △△「世俗」

他のすぐれた因となることによって
↑ ○○「勝義」

鏡の如き智の太自性 (大円鏡智の自性)と⁹⁾
↑ ○○「勝義」

(四波羅蜜 金剛薩女) 有所得などとは異なる空性を自性としているか
↑ △△「世俗」 ↑ ○○「勝義」

ら金剛薩女である¹⁰⁾。

(内の四供養) 「慳貪と破戒と忿怒と懈怠などの所得と異なっており、
↑ △△「世俗」

その対治たる布施と持戒と忍辱と精進の波羅蜜多を自性としているから¹¹⁾」
↑ ○○「勝義」

(外の四供養) 「悪慧と散乱と驕慢と無方便と異なる
↑ △△「世俗」

般若と禅定と発願と方便の波羅蜜多を自性としている¹²⁾」
↑ ○○「勝義」

以下、わかりやすく別表のごとく表した。

別表 1

『金剛界大曼荼羅諸天建立』について

	尊名	世俗あるいは俗諦 (△△)	勝義 (○○)	勝義 (…の因となる)	配当	
五 仏	1 阿閼	貪欲などの無余の垢	大円鏡智	(貪欲などの) 対治である勝れた因となる	五 仏 ↓ 五 智	1 大円鏡智
	2 宝生	無数の分別の自性	平等性智			2 平等性智
	3 弥陀	無余の顛倒	妙觀察智			3 妙觀察智
	4 不空成就		成所作智	無余の生類に対し利益を生ずる因となる		4 成所作智
	5 毘盧遮那	所取と能取の二者	清淨法界の自性			5 法界智
四 波 羅 蜜	6 金波羅蜜	有所得	空性を自性とする		↓ 四 波 羅 蜜	1 空
	7 宝波羅蜜	無余の相	無相を自性とする			2 無相
	8 法波羅蜜	非実在の夢	無願を自性とする			3 無願
	9 羯磨波羅蜜	顛倒した願を成す	無作を自性とする			4 無作
十 六 大 菩 薩 (東)	10 薩	器世間の終わりを分別する	大空性を自性とする	發菩提心の因となる	↓ 十 六 大 菩 薩	5 大空
	11 王	眼などの(感覺器官)の有所得	内の空性を自性とする	菩提心を請召する因		1 内空
	12 愛	色などの有所得	外の空性を自性とする	請召などの慈愍の因		2 外空
	13 喜	内外の所所と身と住の有所得	内外の空性を自性とする	愛着の心の満足を生じる因		3 内外空
十 六 大 菩 薩 (南)	14 宝	空性を有所得	空性を生じる自性	菩提心を増大させる輪を灌頂する因	↓ 十 六 大 菩 薩	4 空空
	15 光	勝義を所得する	勝義を空性の自体とする	灌頂を得た後に、施無畏の相を有して光の因となる		6 第一義空
	16 幢	有為の福德の積集の所得	有為の空性自性	威光を得ることによって慧の相の因となる		7 有為空
	17 美	無為の菩提の積集の所得	無為の空性の自性			8 無為空
十 六 大 菩 薩 (西)	18 法	有と無の二辺を所得	極空性	法施を悦意して住することなどの三昧地に乗じる因	↓ 十 六 大 菩 薩	9 畢竟空
	19 利	輪に依止すること	無始無終の空性	三昧地を成じるなど真實智を生じる		10 無始空
	20 因	善行を捨てざる所得	不捨の空性の自性			11 散空
	21 語			法輪に住する者とそれらの所化の人々の説法と説法に入る因となる		12 性空
十 六 大 菩 薩 (北)	22 業	(十) 力と(四) 無畏などの法身を所得すること	一切法空性	勝義の空性の一部を有する因	↓ 十 六 大 菩 薩	14 諸法法空
	23 護	自と共通の相の所得	自の相を空性の自性とする	業に住する者達の集まる因		13 自性空
	24 牙	無所得と所得	不可得空性の自性	護衛など障碍を鎮める因		15 不可得空
	25 拳	存在と非存在	非存在の自性の空性	所作を成就して三身を得て、身語心を金剛になして一切の悉地を圓滿する因		16 無法空
内 四 共	26 嬌	慳貪	布施を自性とする		八 供 養 ↓ 八 波 羅 蜜	1 布施
	27 慢	破戒	持戒を自性とする			2 持戒
	28 歌	忿怒	忍辱を自性とする			3 忍辱
	29 舞	懈怠	精進を自性とする			4 精進
外 四 共	30 香	愚慧	般若を自性とする		↓ 八 波 羅 蜜	5 慧
	31 華	散乱	禪定を自性とする			6 禪
	32 灯	驕慢	発願を自性とする			7 願
	33 塗	無方便	方便を自性とする			8 方便
四 摂	34 鈎	不信	信を自性とする	大方便の自性である因	四 摂 ↓ 四 力	1 信根
	35 索	大乘に入る	精進を自性とする行の自性			2 精進根
	36 鎌	失念	徳念を自性とする	断絶の欲を対治する因		3 念根
	37 鈴	諸法を知らない	三昧を自性を有する	一切法不生を示す因		4 定根

四

表から、「△△」に相当する貪欲・分別といった「世俗」と、「○○」に相当する大円鏡智・平等性智といった「勝義」のものは、相容れない二つの対立概念として表されている。

このような「世俗」の意味と「勝義」の意味の間の対立概念を明らかにすることによって、それが行者の修行の進展にどのように役に立っているのかを考察してみたい。

行者の修行の最終ゴールは、仏陀になることである。しかし、行者は凡夫であり△△で表されるところの「世俗」に満ちた存在である。しかし、一つの△△をマンダラに表された尊の○○の自性によって対治することでマンダラの尊と同じものに変換してゆくことができる。

阿閼如来を例にとれば、行者は自身の心に有する貪欲という「世俗」なるものを、大円鏡智という「勝義」の自性をもって対治することができれば、阿閼如来と同じ大円鏡智の自性を有することができる。宝生如来も同様に分別といった「世俗」を対治する平等性智によって、宝生如来と同じ自性を有することができる。

このように、対治されるべきものを一つ一つ取り除いていけば、最終的には行者は全ての智を円満する状態となる…という修行のシステムを示したものであることを見て取ることができる。

大乘仏教の行者が延々と時間をかけて六波羅蜜の修行を行って仏陀になることを目指す対して、「○○（勝義）をもって、△△（世俗）のものを退ければ、マンダラの尊と同じ状態になることができる」という速疾で明確な修行のシステムを示したものであるように思われる。

ここで、後期密教の修行システムとの違いを考察してみたい。

後期密教に代表される無上瑜伽タントラの聖典の一つである『ヘーヴァジュラタントラ』は [野口 1993,111-113] [野口 1996,121-137] によれば、タントラ仏教におけるマンダラは聖と俗の世界が二重写しになっている宇宙の全体像である。

とされる。そして、マンダラの諸尊という聖なる存在が同時に俗なるものでもあることが可能である理由について、『ヘーヴァジュラタントラ』の生起次第の「清浄」という概念を手がかりに、それが空の思想に基づくものであると論じている。

例えば、『ヘーヴァジュラタントラ』のマンダラの女尊たちは、〇〇で表される五智などの「仏の徳（勝義）」を体現しているが、同時に△△で表される五蘊や煩惱などの「世俗」の世界も表しており、「〇〇にしてかつ△△でもある」という聖俗一体の様相を見て取ることができる。

一つの尊の中に、五蘊や煩惱といった「世俗」と、五智などの仏の徳という「勝義」二つの意味を配当し、本性は「空」という思想に基づけば同じである……と言うのが、後期密教の考え方であるとするならば、あくまでも「世俗」と「勝義」の間に対治関係を設定する VSV とは、思想は異なっている。

後期密教のように、「世俗」と「勝義」がどちらも本質が「空」であるから同じであるとは、VSV は言っていない。「世俗」と「勝義」が対治関係にあることの背景には、伝統的な波羅蜜の考え方があるように思われる。しかし、そこにマンダラの尊格を用いたことによって、より速く明確な修行のシステムを示したのではないかと思われる。

そして、その修行が進んでいった場合の進展のあり方というのを表したのが、十二の地次第である。

2-2 「十二地次第」について

「十二地次第 (saḥi go rims)」は、菩薩の修行の階梯としての十二の地 (sa=bhūmi) を立てたものであって、十二のそれぞれの地には名前がついていない。[北村 1974,74-75] は、十六大菩薩の自性と結びつけている。

十二の「地次第」を簡単に述べるならば、菩薩の階梯を

初地（真如に染念や悦意を生じる）¹³⁾

→第二地（無畏が生じる）¹⁴⁾

→第三地（善逝がかの菩薩に対して慈の幢を立てる）¹⁵⁾

→第四地（善逝がかの菩薩に対して法輪を転ずる）¹⁶⁾

→第五地（まさにその同じ法輪が三昧の力である）¹⁷⁾

→第六地（まさにその三昧が円満な智恵を生じる）¹⁸⁾

→第七地（[円満な智恵を生じた]まさにその菩薩が、衆生に対して悲を生じる）¹⁹⁾

→第八地（その同じ菩薩が法輪を転ずる）²⁰⁾

→第九地（無漏の供養によって供養する）²¹⁾

→第十地（法幢において灌頂する）²²⁾

→第十一地（第十〔地〕の法の大智恵によって、十一〔地〕は障碍を鎮め愚迷や習気を捨離する）²³⁾

→第十二地（身語意を金剛のように不動にして等覺に達する）²⁴⁾

と順に十二の段階を説いている。

この十二地を初地から順を追ってみていくと、菩薩には善逝から働きかけをもらう側だったのが、第六地で円満な智恵を生じた菩薩が、第七地以降は菩薩自身が善逝の働きができるようになる。

この地次第は、それぞれの地に名称がなく、『十地経』に説かれているような菩薩の十の修行階梯²⁵⁾や『大日経疏』の等覺地・妙覺地を加えた十二地²⁶⁾と同じものであるかどうか判断できない。

また、TLVには「十ヶ月で十の地を得るだろう。十一の月で十一番目の地である佛地を得る。第十二の月によって執金剛となるだろう²⁷⁾」と十二地を説いた箇所がある。

その箇所を解説している Muditakoṣa 著の TLVV には、

『十一月において十一の地である佛地を得る』とは、普覺地の色身を得るのである。

『第十二の月によって執金剛位となるだろう』とは、その同じ金剛薩埵は、一切如来の智恵である大毘盧遮那を本質としているが故に普覺地〔である〕と前に説いた。さらに一切薩埵の中で第一であるものが金剛薩埵なので、全ての中で最勝であるとまた説かれている²⁸⁾

と説いている。TLV 及び TLVV には修行の階梯を十二地で表すことが示されているが、それが VSV の十二地と全く同じものであるかは即断できない。

2-3 「世俗と勝義の相応を示す第二章」について

第二章は、まず「四つの根本たる諸尊の世俗の語の決定を少しく集めて私が書こう²⁹⁾」という一節から始まって、「尊形」と「数」について問答形式で説いている。

一例をあげるならば、

問う、「毘盧遮那は何ゆえに四面であると決定しているのか」というとそれは「金剛阿闍梨に親近するためであり、それは又、その『瓶』³⁰⁾に善逝が阿闍梨を喜ばせるため毘盧遮那が四方をご覧になる」と説かれているからである³¹⁾。

このように、各尊の尊容について、毘盧遮那が四面であること、四波羅蜜が三昧耶形をとること、阿闍をはじめとする四仏・金剛薩埵・金剛王の面の数、そして、八供養の尊容が女尊であること、四摂が忿怒形をとることについての問いと、答えとして他の経軌を経証として挙げている。

まとめると以下のとおりである。

毘盧遮那が四面（経証『瓶』）

金剛波羅蜜をはじめとした金・宝・法・羯の女尊が三昧耶印（経証『真実撰経』³²⁾

阿闍如来をはじめとしたものが一面（経証『忿怒タントラ』³³⁾

金剛薩埵は二面、金剛王は一面（経証『廣大雷音儀軌』³⁴⁾

嬉をはじめとした〔内の四供養と外の四供養〕は、女尊の姿（経証『ビルシャナ大タントラ³⁵⁾』³⁶⁾

鈎をはじめとした〔鈎・索・鏢・鈴の四攝〕は、忿怒形（経証『文殊儀軌』³⁷⁾

それによるならば、彼ら勝者〔各尊の尊容〕は、善逝のお言葉で説かれた如く理解される³⁸⁾。

この本文より、「世俗」と「勝義」が何であるかを考えた場合、「世俗」とは我々の衆生の目に見える尊容（顔の面数であったり、姿形）であり、「勝義」とはおそらく第一章で述べられた「大円鏡智」などのことであると思われる。次に、「決定」の「順番」について説かれている。

所収と能収の二つを離れた智（法界智）より、そのものを明らかにする自性に住すること（大円鏡智）と、自と他を区別しないこと（平等性智）と、真実を享受すること（妙観察智）と、有情に利益をなすという因（成所作智）である³⁹⁾。

それ自体は、世俗の相と異なったものが順番に変わっていく故に、主尊を

決定し眷属と各々を決定してそれによって如実に相応する⁴⁰⁾

つまり、勝義である「法界智」から「四智」が生じる「決定」の順番と、「世俗」の相と異なったものが順番に変わっていくという二方向の決定の順番がある。

次に「無数」について、「前文の如くの側ならば、未完と不相応の故に⁴¹⁾」無数であることと、「後〔文の〕如くならば、法界智から四智が生じることによって、その同じものそれぞれが功德の支分を四×四〔である十六〕の功德を有する⁴²⁾」「嬉女を始めとした内の〔四〕 供養・外の〔四〕 供養と鈎召と引入をはじめとした〔四攝〕は、その儀軌ゆえに〔無数〕である⁴³⁾。」としている。

3. VSVの「世俗」と「勝義」について

VSVの「世俗」と「勝義」についてまとめると、

「世俗」とは

- ・「離れるべきもの」であったり「対治されるべきもの」
- ・我々の衆生の目に見える尊容（顔の面数であったり、姿形）
- ・「世俗」の相から対治していく決定の仕方
- ・「未完」と「不相応」のゆえに無数である

「勝義」とは

- ・世俗を対治する「五智」「四解脱」「十六大空」「八供養」「四力」等の仏の自性
- ・尊容についての経証
- ・「法界智」から四智が生じて、それぞれに功德の支分が十六具わっていることと、内外の四供養や四攝は、〔それらについて説かれた〕儀軌ゆえに数が決定するから無数である。
- ・金剛界の諸尊は〔それらが説かれた〕儀軌ゆえに、勝義として数と順番が決定する。

以上のように考えられる。そして、「勝義」は「世俗」を対治するものとして説かれる。

VSVの短い本文の中で、何故このように、何度も金剛界のマンダラの「世俗」と「勝義」が説かれているのであろうか。

Muditakoṣa が *TLVV* や *VSV* を著したと考えられる時代は、無上瑜伽タントラへ展開していく端境期であるとされ、[北村 2012] は、*TLV* を無上瑜伽タントラへの橋渡しと位置づけている。

VSV の「勝義」と「世俗」は、野口の主張する「聖と俗の世界が二重写しになっている」無上瑜伽タントラを代表する経典の『ヘーヴァジュラタントラ』で説かれる構造とは、異なるものである。しかし、「世俗」のものであるところの行者が、どのようにして「勝義」である仏となるかを、「△△という世俗を○○という勝義によって対治すれば仏になりうる」というシステムを明確に示したものである。

六波羅蜜の修行によって、長い期間かけて仏になる修行を積むよりも、*VSV* はより速く明確に仏になるプロセスをマンダラの尊を用いて示したとすることができる。

「勝義」と「世俗」を同時に表現する無上瑜伽タントラのマンダラに比べると、あくまでも「勝義」が「世俗」の対治となっているのは、無上瑜伽タントラよりも前の段階のものであると考えられる。

したがって、この *VSV* は、「世俗」の存在である行者をいかに「勝義」である仏の状態へと導いていくかを示すという明確な目的に基づいて著された儀軌であるということが出来る。また、無上瑜伽タントラへ展開する前の段階で生じたものであると推察され、*TLVV* と同じ著者でほぼ同時代に書かれた *VSV* もまた、[北村 2012] の言う「無上瑜伽タントラへの橋渡し」と位置づけることができる。

略号

VSV : *Vajradhātu-mahāmaṇḍala-sarvadeva-vyavasthāna-nāma*

TLV : *Trailokyavijaya-mahākālpa-rāja*

TLVV : *Āryatrailokyavijaya-nāma-vṛtti*

TS : *Sarvatathāgata-tattvasaṃgraha-nāma-mahāyānasūtra*

『十地経』：『佛説十地経』

『大日經疏』：『大毘盧遮那成佛經疏』

大正蔵：大正新脩大蔵経

参考文献

Muditakoṣa 著 『rDo rje dbyiñs ki dkyil ḥkhor chen poḥi lha rnam kyi rnam par gshag pa 金剛界大曼荼羅諸天建立』 [東北 No.2504 大谷 3327]

Muditakoṣa 著 『ḥPhags pa ḥjig rten gsum las rnam par rgyal ba shes bya baḥi ḥgrel pa 聖降三世と名づくる注釈 (Āryatrailokyavijaya-nāma-vṛtti)』 [東北 No.2509・大谷 No.3332]

『ḥJig rten gsum las rnam par rgyal ba rtog paḥi rgyal po chen po 降三世大儀軌王 (Trailokyavijaya-mahākālpā-rāja)』 [東北 No.482・大谷 No.115 訳者 Rin chen bzañ po]

『Sarvatathāgata-tattvasaṃgraha-nāma-mahāyānasūtra』：堀内寛仁編著『梵蔵漢対照初會金剛頂經の研究梵本校訂篇（上）（下）』密教文化研究所

『De bshin gśegs pa thams cad kyi de kho na ñid bsdus pa shes bya ba theg pa chen poḥi mdo (Sarvatathāgata tattvasaṃgraha nāma-mahāyānasūtra)』 [東北 No.477・大谷 No.112]

『佛説十地經』戸羅達摩訳 [大正蔵 No.287,10 卷]

『大毘盧遮那成佛經疏』一行記 [大正蔵 No.1796,39 卷]

北村太道 1974 「チベット文『金剛界大曼荼羅諸尊建立』和訳研究『密教文化』107号 1974年7月

北村太道 1994 『Trailokyavijayakālpā』における秘密成就法について『密教学研究』26号 1994年3月

北村太道 2012 『降三世儀軌』について『平安仏教学会年報』7号 2012年10月

北村太道・タントラ仏教研究会訳 2014 『全訳 降三世大儀軌王 / 同ムディータコーシャ註釈』起心書房 2014年3月

田中公明 2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社 2010年2月

中島小乃美 2014 「Muditakoṣa 著『降三世儀軌訳』について『密教学研究』

46号 2014年3月

野口圭也 1993「マンダラの成立根拠」立川武蔵編『曼荼羅と輪廻—その思想と美術』佼成出版社 1993年12月

野口圭也 1996「タントラ仏教における自己と宇宙」立川武蔵編『マンダラ宇宙論』1996年9月

平賀由美子 2000「vyavasthāna についての一考察」『宗教研究』323号 2000年3月

松森大樹 2003「金剛薩埵の一考察」『密教学』39号 2003年1月

- 1) 本論文で扱う『金剛界大曼荼羅諸天建立』は、チベット大蔵経（北京 No.3327, デルゲ No.2504）の漢訳の題名をそのまま使用した。『丹殊爾目録』I, 3「CI（漢文附属目録）中正金剛大壇場諸佛妙設」とある。梵題は、デルゲ版では『*Vajradhātu-mahāmaṇḍala-sarvadeva-vyavasthāna-nāma*』北京版では、『*Vajradhātudeva-mahāmaṇḍala-sarvavyavathole-nāma*』である。（以下、本文献を VSV とする）VSV では、「sarvadeva (lha rnam)」が「天部」ではなく、「尊格」の意味で用いられており、本文内容から勘案すると先行研究である [北村 1974] にならって『金剛界大曼荼羅諸尊建立』とする方が適切であると思われる。
- 2) [北村 1994] [田中 2010] [北村 2012] [北村太道・タントラ仏教研究会訳 2014] [中島 2014]
- 3) rdo rje dbyiñs kyi dkyil ḥkhor chen poḥi lha rnam kyi rnam par gshag pa las don dam paḥi rnal ḥbyor bstan pa ste leḥu dañ poḥo /VSV. D.204b5,P.233a3-4
- 4) rdo rje dbyiñs kyi dkyil ḥkhor gyi lha rnam kyi (P.omit.rnam kyi) rnam par gshag pa las kun rdsob dañ don dam gyi rnal ḥbyor bstan paḥi leḥu ste gñis paḥo /VSV.D.205b5,P.234a5-6
- 5) [北村 1974,]
- 6) chos kyi dbyiñs sin tu rnam par dag paḥi ño bo ñid /VSV.D.202b2,P.230b3
- 7) chos kyi dbyiñs kyi ye šes /VSV.D.204b2,P.232b8,VSV.D.205b3-4,P.234a3-4

- 8) de la ḥdod chags la sogs paḥi dri ma lus pa dañ bral ba ñid de /VSV. D.202a7,P.230a8-230b1
- 9) de las gshan paḥi khyad par can gyi rgyur gyur pa ñid kyis na me loñ lta buḥi ye śes kyī ño bo ñid dañ /VSV.D.202a7,P.230a8-230b1
- 10) de ñid ni ñe bar dmigs pa rnam las ldog paḥi stoñ pa ñid kyī bdag ñid can yin paḥi phyir rdo rje sems maḥo /VSV.D.202b2-3,P.230b4
- 11) ser sna dañ / ḥchal paḥi tshul khirms dañ / khro ba dañ / le lo la sogs paḥi ñe bar dmigs pa las ldog ciñ / deḥi gñen po ñid kyī (P.kyis) sbyin pa dañ tshul khirms dañ bzod pa dañ / brtson ḥgrus kyī pha rol tu phyin paḥi bdag ñid can du gyur pas VSV.D.203b5-6,P.232a1-2
- 12) śes rab ḥchal pa dañ / rnam par yiñ ba dañ log paḥi ña rgyal dañ thabs med pa las log pas śes rab dañ bsam gtan dañ smon lam dañ thabs kyī pha rol tu phyin paḥi bdag ñid can du VSV.D.203b7-204a1,P.232a4
- 13) de kho na ñid la rjes su chags pa skyed pa dañ rjes su chags paḥi yid bde ba skyes paḥo / VSV.D.204a5-6,P.232b2-3
- 14) dbaḥ mi ḥphrogs par bya baḥi phyir mi ḥjigs pa skyed (P.bskyed) paḥo VSV.D.204a6,P.232b3-4
- 15) byaḥ chub sems dpaḥ de la bde bar gśegs paḥi thugs rjeḥi dbañ gyis / byams paḥi rgyal mtshan bsgreñ baḥo / VSV.D.204a6-7,P.232b4
- 16) byaḥ chub sems dpaḥ de la bde bar gśegs pas chos kyī ḥkhor lo bskor ro /VSV.D.204a7,P.232b4-5
- 17) chos kyī ḥkyor lo de ñid tiñ ñe ḥdsin gyī stobs so / VSV.D.204a7,P.232b5
- 18) tiñ ñe ḥdsin de ñid rdsogs par byed paḥi ye śes skyed (P.bskyed) do / VSV.D.204a7,P.232b5
- 19) byaḥ chub sems dpaḥ de ñid sems can la sñiñ rje skyed do /VSV. D.204b1,P.232b5-6
- 20) de ñid kyis chos kyī ḥkhor lo bskor ro /VSV.D.204b1,P.232b6
- 21) zag pa med paḥi mchod pas mchod do /VSV.D.204b1,P.232b6
- 22) chos kyī rgyar mtshan du dbañ bskur ro /VSV.D.204b1,P.232b6
- 23) bcu paḥi chos kyī ye śes chen pos bcu gcig pa la bgegs ñe bar shi bar

- byed do // rmoñs pa dañ gnas ñan len pa la sogs pañi bag la ñal rnam
spoñ ño / VSV.D.204b1-2, P.232b6-7
- 24) sku gsuñ thugs rdo rje ltar mi śigs pa ste rdsogs pañi sañs rgyas su
mthar phyin te / VSV.D.204b2, P.232b7-8
- 25) 「何等爲十一名極喜地二名離垢三名發光四名焰慧五名難勝六名現前七名
遠行八名不動九名善慧十名法雲」大正藏 No.287,536b3-6
- 26) 「亦如菩薩十二地即十住等妙之覺」大正藏 No.1796,689b25
- 27) zla ba bcus ni sa ba bcu thob par ḥgyur ro // zla ba bcu gcig gis ni sa
bcu bcig pa sañs rgyas kyi sa thob bo // zla ba bcu gñis bas ni rdo rje
ḥjin par ḥgyur ro / TLV D.17a1-2, P.9b5
- 28) zla ba bcu gcig gis ni sa bcu gcig pa sañs rgyas kyi sa ḥthob po shes pa
kun tu sañs rgyas pañi sa gzugs kyi sku ḥthob bo // zla ba bcu gñis kyi
ni rdo rje ḥdsin par ḥgyur ro shes bya ba rdo rje sems dpaḥ ñid sañs
rgyas thams cad kyi ye śes kyi rnam par snañ mdsad chen poñi ño bo
ñid yin (P.omit.yin) pas na kun tu sañs rgyas pañi sa goñ du bśad do //
yañ gcig tu sems dpaḥ thams cad kyi dañ po ñid rdo rje sems dpaḥ yin
pas kun gyi mchog tu yañ bśad do / TLVV D.229a-229b, P.261a6-8
- 29) rtsa bañi bshir gyur lha rnam kyi // kun rdsob ñag gi ñes pa ni // cun
zad bsdus te bdag gis bri / VSV.D.204b6, P.233a4
- 30) [北村 1974] は、rdo rje slob dpon la bsñen bkur ba ste de yañ bum pa
las / の箇所を「金剛阿闍梨を恭敬されたからであり、そのことはまた
『瓶』(gola,ghaṭa) の中に」としている。
- 31) dris pa rnam par snañ mdsad ni ciñi phyir shal ba shir ñes śin / de ni
rdo rje slob dpon la bsñen bkur ba ste de yañ bum pa las / bde gśegs
slob dpon dgyes pañi phyir // rnam par snañ mdsad phyogs bshir gzigs
// shes gsuñs pañi phyir ro / VSV.D.204b7-205a1, P.233a6-7
- 32) rdo rje sems ma la sogs pa ni dam tshig gi phyag rgyar rig pa ma yin
no she na / de ni gdul byañi dor bstan pa ste / de yin de kho na ñid
bsdus pañi rgyud las / mu stegs pa la phan don du // sañs rgyas btsun
mo (D.po) phyag rgyar bcas / shes gsuñs pañi phyir ro / VSV.D.205a1-

2.P.233a7-233b1

- 33) mi bskyod pa la sogs pa rnam par snañ mdsad la shal gzigs par mi rigs so she na de ni chos kyi dbyiñs kyi ye śes kyi dbañ du byas pa ste / de khro boñi rgyud las / dper na sa gshe chen po las / rtsi śiñ la sogs ḥbyuñ ba bshin // chos kyi dbyiñs kyi ye śes las // ye śes gshan yañ ḥbyuñ phyir ro // shes gsuñs so / VSV.D.205a2-3,P.233b1-2
- 34) rdo rje sem dpañ la sogs pa ni shal gñis dañ ldan pa dañ / rdo rje rgyal po la sogs pa ni shal gcig tu ñes pa brdsod de de ni gtso boñi dbañ du mdsad pa ste de yiñ ḥbrug sgra rgyas pañi rtag pa las / (P.ltag ba la /) thun moñ pa ni ma yin pañi // so so dag la shal gñis gzigs / thug moñ gtso bo ñid gcig ste // rdo rje rgyal po la sogs pa // shal gcig ñes shes bstan pañi phyir ro / VSV.D.205a3-5,P.233b3-4
- 35) [北村 1974] [中島 2014] は、『大日経』であるとしている。
- 36) sgeg mo la sogs bud med kyi cha lugs ḥdsin pa ni mos pañi dbañ du bstan pa ste de yañ rnam par snañ mdsad kyi rgyud chen po las / sems chan mos pa tha dad pas // sañs rgyas sku ni cir yañ bstan // shes gsuñs so / VSV.D.205a5-6,P.233b4-5
- 37) dris pa rdo rje lcags kyu la sogs pa ni khro boñi cha lugs su ḥdsin pa ji lta bu she na de ni ñin moñs pa la sogs pañi bdud tshar gcod pa (P.bcad ba) dañ / dños grub la sogs pañi mtshan ñid dañ ldan pa ste de ldem por bstan pa ste de yañ ḥjam dpal gyi rgyud las (P.la) / ñon mños bdud rnams tshar gcod pas // mchog gi dños grub stsol (P.rtsol) byañi phyir // rdo rje lcags kyu la sogs ni // khro boñi cha lugs kho nar ñes // shes gsuñs te VSV.D.205a6-7,P.233b5-7
- 38) de bas na rgyal ba de dag ni bde bar gśegs pañi bkañ dag las smos pas de lta bur rtags na VSV.D.205a7,P.233b7-8
- 39) gzuñ ba dañ ḥdsin pa gñis dañ bral bañi ye śes las de ñid gsal bañi ño bor gnas pa dañ / bdag dañ gshan gyi rnam par mi ḥbyed pa dañ / bden pa ñams su myoñ ba dañ / ḥgro bañi don byed pañi rgyur gyur pa dañ VSV.D.205b1-2.P.234a1-2

- 40) de ñid ni kun rdsob mtshan ma rnams las ldog pa ni rim gyis ldog paḥi
phyir gtso boḥi ñes pa ḥkhor rnams dañ / rañ rañ gi ñes pa de dañ des
ni ci rigs su spyar ro / *VSV.D.205b2-3,P.234a2*
- 41) grañs med pa ni phyogs sña ma ltar na ma tshañ ba dañ mi dgos paḥi
phyir dañ *VSV.D.205b3,P.234a3*
- 42) phyim ltar na ni chos kyi (P.gyi) dbyiñs kyi ye śes las ye śes (D.omit.
las ye śes) bshi ḥbyuñ bas de ñid re re shiñ yañ yon tan gyi cha bshi
bshi dañ ldan paḥi phyir *VSV.D.205b3-4,P.234a3-4*
- 43) sgeg mo la sogs pa la ni phyi nañ gi mchod pa dañ dgug pa dañ gshug
pa la sogs pa des cho ga paḥi phyir te de bas na rdo rje dbyiñs kyi
lha rnams ni don dam par grañs dañ go rims (P.rim) ñes baḥo /*VSV.*
D.205b4-5,P.234a4-5